

2107年11月12日(日)唯研個人発表(神戸大学)

資料

中河 豊

1 スピノザ論争とスピノザ・ルネサンス

Über die Lehre des Spinoza in Briefen an den Herren Moses Meldelssohn
(1785)

Friedrich Jacobi Werke, Gesamtausgabe, hrsg. v. Klaus Hammacher und Walter Jaeschke, Bd. 1, 1, Hamburg 1998.

レッシング宅でのヤコービの滞在は1779年7月5日(水)から7月11日まで。7月6日(木)に主要な対話がなされた(Vgl. S. 391)。

「おそらくあなた(Elise Reimarus: 中河)はご存じでしょうが、もしもご存じでないとすれば友情の薔薇のもとにあなたに打ち明けます。レッシングはその最後の日々において決然としたスピノザ主義者(ein entschiedener Spinozist)でした。」(S. 8)

「レッシング: 詩の用いている視点(Gesichtspunkt)が私自身の視点である。神性の正統的概念はもはや私にはない。私はそれを受け入れられない。ヘン・カイ・パーン(Eins und Alles、一にして全: 中河)。これ以外のものを私は知らない。この詩は、これに向かっている(S. 16)。私は、この詩がたいへん気に入ると告白すべきである(S. 16f)。ヤコービ: それではあなたはスピノザに同意するか。レッシング: もしも誰かの名前を挙げなければならないとすれば、私は別の人は知らない。」(S. 17)

「レッシング: スピノザの哲学以外には哲学はない。ヤコービ: それは本当かも知れない。決定論者は、説得的であろうとすれば、宿命論者にならざるを得ない。・・・レッシング: 私は、我々がお互いに理解していると気づく。私は、あなたがスピノザ主義の精神(der Geist des Spinozismus)をどのように見るかについてますます聞きたい。私が考えているのは、スピノザ自身において動いていた精神である。ヤコービ: それは最古のもの: 無からは何も生じないである(a nihilo nihil fit.)」(S. 18)

「レッシング: 我々のCredoに関して相違はない。ヤコービ: 私はそう望まない。私のCredoはスピノザにはない。・・・ヤコービ: 私は世界の知性的人格的原因(eine verständige persönliche Ursache der Welt)を信じる。・・・J.: 私は死の跳躍(durch einen Salto mortale)により切り抜ける。・・・ヤコービ: 私が宿命論とこれに係わる全てに反対して宿命論から推論すること、これが全てである。作用原因だけがあり、目的原因がないとすれば、全自然において思考する能力は、単なる眺めること(das Zusehen)である(20)」。

「ヤコービ: 私の判断では、探求者の最大の功績は現存在を暴露し開示すること(Daseyn zu enthüllen und zu offenbaren)である。説明(Erklärung)は彼には手段であり目的への道である。それは最終目的ではない。彼の最終目的は、説明されないもの、分析されないもの、直接的なもの、単純なものである(was sich nicht erklären läßt: das Unauflösbare, Unmittelbare, Einfache)(29)。

「ヤコービ: しかし、私が守ったし、守り続けているのは、スピノザとその体系ではない。それはパスカルの言葉である: 自然はピュロニストを混乱させ、理性は独断論者を混乱させる(la nature confond les Pyrrhoniens, & la raison confond les dogmatistes.)」(54)

2 ヘルダーリンとシェリングのスピノザ受容 フィヒテ知識学との対決

1) ヘルダーリン: フィヒテ的自我への批判、人間と自然の「美しい合一」、存在論

1790年11月頃、「スピノザの学説についてのヤコービの書簡」(ヤコービ『スピノザの学説について』の要約)

1791年2月12日、ヘーゲルの記念帖にヘルダーリンがゲーテの言葉を記入し、ヘーゲルが「一にして全」と書く

1794年12月『ヒュペーリオン』散文稿、1795年1月『ヒュペーリオン』韻文稿：人間と自然との抗争を終結する「美しい合一」

1795年1月26日付ヘーゲル宛書簡、「スピノザの読書」

「絶対的的自我(=スピノザの実体)は全ての実在を含んでいる。それは全てであり、その外には何もない。したがってこの絶対的自我にはどんな客体もない。」(Briefe von und an Hegel, Bd. 1, S. 19.)

1795年3月友人カメラの記念帖に『スピノザ書簡』にあるパスカルの言葉を記入

1795年4, 5月頃『存在、判断、可能性』:「根源分割(Ur-Theilung)」以前の「端的に生じる客体と主体の合一」=「絶対的存在」

「世界の外になお一者を求めること」への疑問。(『ヒュペーリオン』、FHA 11, 589, StA 6, 1, 63f.)

2) シェリング：フィヒテ的自我から自然哲学への移行

1795年2月4日付ヘーゲル宛書簡、シェリングはスピノザ主義者であると自己規定

「スピノザにとっては世界(主観に対する端的な対象)が全てである。私にとってはそれが自我である。」「意識は、対象なしには不可能である。しかし、神、すなわち絶対的自我にとってどんな対象も存在しない。」(Briefe von und an Hegel, Bd. 1, S. 22.)

Vom Ich als Princip der Philosophie oder über das Unbedingte im menschlichen Wissen(1795)

F.W.J. Schelling Ausgewählte Schriften, Bd. 1, 2. Aufl., Frankfurt am Main 1985.

「ヤコービの表現」で言えば、問題なのは「現存在を暴露し開示すること」である。「人間の中で自己に対して現前する直接的なもの(das unmittelbare sich selbst Gegenwärtige im Menschen)」。学問の改革」ではなく学問の「諸原理の全的転倒(gänzliche Umkehrung der Principien)」、学問の「革命」(46)

(47)。

「人間の本質は絶対的な自由にあり、人間はどんなもの(Ding)でも事柄(Sache)でもなく、その本来の存在に従えば客体ではないとの主張を原理として立てる哲学」(47)。「客観的真理の支配への屈従」(47-48)、「客観的真理の奴隷」を「自由の予感(Ahnung der Freiheit)」によって震撼させる(48)。

「根本的には、スピノザは無制約的なものを非我の中に定立したのではない。彼は非我を絶対的なものに高めることによって自我にしたのである」(75)。

「実体が無制約なものであれば、自我は唯一の実体である。」(82)

「すべては自我の中にあり自我に対してある。哲学は自我の中に一にして全を発見した。」(83)

Einleitung zu: Ideen zu einer Philosophie der Natur als Einleitung in das Studium dieser Wissenschaft(1797)

「私は、自然の哲学が自然の可能性、すなわち全経験的世界の可能性を諸原理から演繹しなければならないと前提する。」(249)

「人間精神において本源のかつ必然的に合一していたものを、自由を通じて再び合一するために、すなわち、分離を恒久的に止揚するために、哲学は本源的分離から出発する。」(252)

「私はものではなく、客体ではない。私は全く自分の世界に生きており、他の存在のためではなく、自分自身のためである。私の中には、はたらきと行為(Wirkung und Handlung)のみがありうる。」(255)。

「十分な意識を伴って精神と物質が一つのものであると、思考と延長が同じ原理の変容であると把握した最初の哲学者はスピノザであった」。彼の体系は、「創造的想像力の最初の大膽な構想」であった。」(258)

「われわれの本性の中で、理想的なもの(Ideales)と実在的なもの(Reales)とは密接に合一していると、彼(スピノザ：中河)は洞察した。」(273)

スピノザは「有限なものと無限なものが本源的にわれわれの中で合一され互いから生じること、これをわれわれの本性(自然)から説明することはない。」(274)

「自分の自然についての予感(Ahndung seiner eignen Natur)が人間を襲う。この自然の中では、直観と概念、形式と対象、理想的なものと実在的なものは本源的に同じ一つのものである。・・・われわれが自然について反省的に思考するのが少ないほど、自然はそれだけ理解される仕方(verständlich)にわれわれに語りかける(285)。

「私が自然と同一であるかぎり、私自身の生を理解するのと同じほど、私は生きた自然とは何かを理解する。自然のこの普遍的生が、最も多様な形式において、段階的發展において、自由への少しずつの接近において、自己を開示すること、これを理解せよ。私と全ての理想的なものを自然から分離すると(285)、私には死んだ客体しか残らない。私の外部の生がいかに可能か、私はこれを理解することをやめる。」(286)

「自然と自由の絶対的合一」(286)

「この Naturprodukt (生きた有機体：中河)の中には秩序づけ関連付ける精神が支配している。この二つの原理(自然と自由：中河)が Naturprodukt の中で分離されずに、密接に合一しているとされる。」(286)

「自然とは何か、何であるべきかについての予感」(293)

「自然自身がわれわれの精神の法則を本源的かつ必然的に表現するだけでなくこれを自ら実現すること、我々はこれを欲する。自然は、これをなすかぎりでのみ、自然であり、自然と呼ばれる。」(293f)。

「自然は可視的な精神であり、精神は不可視の自然である定めである。われわれの内部の精神とわれわれの外部の自然の絶対的同一性の中で、いかにしてわれわれの外部の自然が可能かという問いが解決される。」(294)

H. Steffens のロマン主義における予感

「コペンハーゲン講義」(1802-1804)

「私は予感(Ahnelser)を喚起するが、これは証拠(Evidenz)を与えない。一般的経験、日常生活が有限な衝動に制約されて我々をそこに導くものよりも、それは生と現存在へのより意義あるまなざしを開示する。自然、歴史、我々の最奥の心情(Gemyt)へのより深いまなざしから、自分の源泉から生じるように哲学的問題が生じる。」(Steffens, Henrich, Entledning til Filosofiske Forlesningen, in: Henrich Steffens, Forlæsningen og Fragmenter, (Boyson, Emil. Ed.), Johan Grundt Tanum Vorlag: Oslo 1967, S. 24).